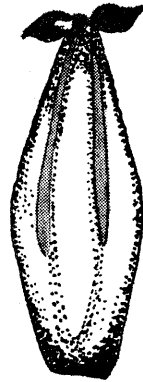


## 保育の一日 ⑧

——存在世界としての保育——



津 守 真

### 五 物質のイメージ

#### 1 保育と〈物質のイメージ〉

人の身体と物質との接するところに生じる感覚と、これがつくりだすイメージの推移変化は、明確な意図をもった意識的活動ではないし、また、全く無意識の活動でもない。その中間にあつて、なかば意識されてはいる

が、明確な意識にはなっていない。幼児の遊びには、このような物質のイメージを本体とする場合が多い。土の中に手をいれてこねているうちに、手の中の土はつぎつぎに形をかえ、子どもはその過程をたのしむ。おにごっこでは、追いかけて追いかけて、大気の中を走りまわる感覚をたのしみ、かくれんぼは、物蔭の片隅に身をひそめる空間の感覚が主となっている。ままごとも、その内容は、土をこねること、切り刻むこと、美しく並べる

ことなど、物質のイメージが主となっていることが多く見られる。

保育者は、子どもの活動に参与し、子どもがふれるのと同じ物質に直接ふれることにより、自らの物質のイメージをもつことができる。これは子どもと一緒の遊びの中に浸るときに起きることである。また、保育者は子どもと応答するパートナーとなることによって、子どもとイメージを共有することができる。これは子どもの誘いや要求にこたえて動くときに体験される。また、子どもの行動の観察にもとづいて、子どもの感じているであろうイメージを推察し、解釈することができる。物質のイメージは、触覚、運動感覚等、身体感覚にもとづくものであるから、おとなも、子どもと同様に、自らの自身体験によって体験し、身体感覚の水準で共感することが理解の出発点となる。

イメージという語が用いられるとき、その理解の仕方にはいくつかの異った場合がある。第一には、眼前に見

ていたものが、眼前から取り去られても、目の前にあるかのように思い浮べる精神機能をいう。これは *representation* すなわち、再現あるいは表象能力であって、ピアジェがいうイメージである。第二には、無意識の内容を、象徴あるいはシンボルとしてつくり出す能力で、フロイトやユングなど精神分析がいう場合のイメージである。第三には、ここで述べている「物質のイメージ」で、レヴュリー、夢想など半意識の状態で、物質に直接ふれる身体感覚に伴うイメージである。パシュラール<sup>註1</sup>が体系的に展開した一連の著作の主題である。第四には、普通に、何かをイメージするというような場合で、想像によって自由に頭に思い浮べるといような通俗的な用い方である。これらは相互に関連はあるが、それぞれ異った精神機能を指しており、同じイメージという語を使っても異った内容を意味するので注意を要する。ここでは、〈物質のイメージ〉を取り扱う。

物質のイメージは、日常生活の中で、普通に体験されている現象で、ことに、言語を十分にもたない子どもに

おいては、生活の中でその占める位置は大きい。しかし、客観性や目標意識、論理など合理的意識に価値をおくおとなは、物質のイメージの存在や、その果す重要性に気付かない場合がある。保育は、毎日の日常生活を進める中で行われるので、行動の結果や成果のみに目が奪われて、子どもの生活を動かしている原動力と子どもの世界に気づくには、おとなの側に、見方の転換の努力が必要になる。おとなは、自らの判断を停止して、その場にとどまり、予期しなかった子どもの行為に心を開き、自らの感覚に敏感になることを試みることによつて、それは可能になる。このような、おとなにとつて空白の瞬間がなければ、保育は成り立たない。このことは、おとなの人生における価値観を放棄することを意味するのではない。おとなは、この空白の瞬間の中で、物質のイメージを喚起され、子どもの世界に共感し、自らの世界が開かれ、自分を変化させられるのである。

## 2 物質のイメージの記述

物質のイメージは、言語以前の身体感覚とそれに伴うイメージであるので、文字で記述することに困難が伴う。たとえば、砂場で、子どもは砂を高く積み、穴を掘り、水を注ぎ、砂と水をまぜ合わせてだんごをつくるなど、一時間も二時間もあきることなくあそぶが、その経過を詳細に記録することは容易でない。手の動きとそれにともなう砂の変化は微妙であつて、何と書き記してよいかわからないことが多い。しかし、自分も一緒に手を砂の中にいれ、水と一緒にこねて、子どもと同じようにしてみると、何度も砂を運び出すことによつて深い穴を探つてゆく感覚、冷たい水を砂とまぜて、それを手の中で固めてゆく感覚など、触覚運動感覚によつて、忽ち知ることのできることもある。これは客観的な行動記録ではとらえきれない内面の過程である。しかも、単に内面だけのことはなくて、外在する物質との接触によつて、外に形を表出してゆく過程である。

パンシュラールが、「大地と意志の夢想」<sup>注2</sup>の中で、捏り粉について述べているところは、子どももの砂遊びに類似している。彼によれば、大地の物質の「抵抗と柔軟さの完全な綜合」「受けいれる力と拒否する力のすばらしい均衡」が、働く手に直接の活力を与えて、粉や土があまり軟らかすぎるとか、あまり硬すぎるといふ判断が生じる。丁度よい捏り粉をつくるのにはどの程度に粉と水とを混ぜたらよいかということ、手が本能的に知っている。「捏粉を夢想する者はこの完全な捏粉を手ではっきりと識別するのである」<sup>注3</sup>つまり、人は捏り粉を物質のイメージによってとらえている。その捏ねるイメージを記述するのに、彼は詩人による記述を引用して、そのイメージの存在の確証としている。それはひとりの髯の男のパン職人の手についての記述である。

そのパン職人は、「まぜ具合をみたあとで、桶の中にちよっと多く水を入れてそのまぜものをのぼした。その配分の正確さについて、彼の手は自信にみちており、水差しのかたむけかたは実に巧みであって、土器の口と上

等のメリケン粉の間にきれいな水がきれめのない、完全な水晶の弧をえがくのを見た。<sup>注4</sup>

これは高名な詩人の記述であるが、この無名のパン職人の手の動作を、ひとりの子どももの砂場の行為におきかえても通用するであろう。また、高名な詩人を、無名の一保育者におきかえても通用するはずである。これと類似した手の動作は、幼稚園の砂場で無数にくり返されている。

パンシュラールは、読書中に膨大な数のイメージを採録したという。私共は、保育の中で、無数のイメージに出会う。詩人がそのイメージを言語にするのに苦心したように、私共は、子どもと共にあって、たしかに体験として共有したイメージを、言語によって記録するのに苦労する。しかもそのイメージは、子どもに即し、具体的場面に即し、保育者に即して多様である。保育研究においては、すでに、多様な物質のイメージの記述の試みが多くあるが、今後に関わっている分野は大きい。<sup>注5</sup>

### 3 物質のイメージの個別と普遍

物質のイメージは、触覚運動感覚によるところが多く、したがって、それは個々の人が具体的なものに向うところに生れる。また、それを第三者の立場からとらえる場合には、個が具体的に向うところに、第三者である私が身をむけるときにはじめて了解される。遠くから、視覚によって、客観的に見ていたのではわからない。

このことは、バシュラールも再三述べている。「眼——この監視者——が仕事をさまたげにあらわれる。」<sup>注6</sup>と彼はいう。物質のイメージは、生き生きとしており、本人にとつては疑いもなく明瞭であるのに、眼が介入し、客観的概念になると、生命力が失せてしまう。それはイメージを記述することに伴う宿命ともいえる。それに再度生命をふきこもうとするならば、「視覚と同様に、手が手の夢想と手のポエジーをもつことを理解しなければならぬ」<sup>注8</sup>のである。子どもが物質を扱う行動の観察を視覚にとどめず、眼を反転させて、子どもの触覚の座に身

をおき、そこに生れ出るイメージをとらえること、しかもそれを単なる情熱的主観的確信としてとらえるのではなく、人間の精神の根底に存在するイメージとして理解しようとする事、それはすでに解釈の領域にはいるのかもしれないが、そこに個別の物質のイメージを普遍化することの課題がある。

バシュラールは、燃え立つ白樺に、狂熱的に突進する蛾の<sup>注7</sup>大群のことをのべて、蛾にとつて、それは「大火災の光景」にひとしく、「このまばゆい光は、燃えあがる森全体の眺めがわれわれにとつてそうであるように、彼らを陶醉させ高ぶらせるのだ」という。この文章と共に、私は精進湖のほとりで、夏の夜、火を焚いたとき、そこに向つて突進しようとした子どもを必死になつておさえたのを思い起す。火に向つて突進する知恵おくれの子ども<sup>注9</sup>の行動は、その子どもの火の物質のイメージを示している。それをおさえる私もまた、高ぶる火のイメージに怖れており、抑える私の力の大きさは、子どもがそれに向う力の大きさをも示している。その力によって、

子どもの火のイメージを理解してよいだろうと思う。

捏り粉について、バシュラールは記述した後、捏り粉のイメージは、物質としての土についてのみでなく、自身について妥当すると述べる。「すべてがわたしにとって捏粉だ。わたしの成長がわたし自身の素材であり、わたしの固有の素材は、行動と情熱だ。わたしは本<sup>註8</sup>当に最初の捏粉である」と彼はいう。物質のイメージは、外在する物質との間に生れる内的イメージにはじまるが、イメージとしての物質にも適用される。一塊の捏粉のような、まだ形をもたない目に見えない素材を前にして、捏ねるイメージが動きはじめる。カロッサの「幼年時代」には、温かく匂いのよい飴をひきのばすのを眺めていた楽しさについて述べられ、夢の中で「ぼくはしばらく捏粉をねったり、捏ねたりした。そしてふと見るとぼくの手のなかにすばらしく美しい小さな人間がいるのだ<sup>註9</sup>」という一節が記される。それは粘土の人形の生成であると共に、人間形成のイメージに比せられる。それ

故に、捏粉の物質のイメージに満ちた台所から子どもを遠ざけることは、後になって決して知ることのできない夢から子どもを引き離すことになる。そして、「小さな子供のとき、家政婦のまわりをうろついたことのある人はしあわせである<sup>註10</sup>」とバシュラールは述べる。

保育には、実に多様な物質のイメージがみちている。保育の一日は、粘土をこねる作業にも似ていて、正確なスケジュールに従って部分を組み合わせることでゆくのではなく、こねているうちに思いがけない形ができてゆく。バシュラールが「それぞれの労働がそのひいきの夢想家をむかえ、その夢に案内者をもつ日が早くこないものか、工場ごとに詩のための机があかれる日よ、早くこい<sup>註11</sup>」と云っていることは、保育にそのままではまることばである。保育者において、全体を目で見渡すだけでなく、それぞれの子どもの身になって、子どもとゆっくりとつき合い、そこで得られたことをことばにしてゆくならば、保育の場はつきることのない人間研究の場となる。

しかし、子どもの世界は、それに価値をおかない眼にはかくされている。パシュラールが云うように、「夢みることを知らない意志は、盲目で偏狭<sup>注12</sup>」である。保育の意志が、想像力を失い、おとなの立場からの一方的な目標遂行の手段となるときには、その意志は、凶らずも「獸的本能」の代弁者となりさがり、高尚な精神をもつた人間の意志ではなくなる。物質のイメージは、後になって理性的合理的精神を形成する基礎でもあり、また人間らしさの根源を保持させる根底でもある。

保育を終えて、子どもたちが目の前から去った後、保育室や園庭の掃除をしながら、心の中に浮び上ってくるのは、子どもと共に過した中で得られた物質のイメージである。それを反芻し、その輪廓を少しずつたどるとき、子どもの世界が次第に明瞭になってくる。それは個に即したイメージが普遍へと転換する作業の第一歩であると思う。

(続く)

注1 パシュラールは科学哲学者であるが、その後半生において、物質の四元素といわれる火、水、風、土及び、時間と空間の物質のイメージについて、文学ことに詩を素材として体系的な著作をした。

注2 パシュラール、及川馥訳「大地と意志の夢想」思潮社

一九七二

注3 前掲書、P 89

注4 " P 90

注5 本田和子「子どもたちのいる宇宙」三省堂 一九八〇

「異文化としての子ども」紀伊国屋書店 一九八二 参照

注6 「大地と意志の夢想」P 91

注7 パシュラール、前田耕作訳「火の精神分析」せりか書房

一九六九 P 39

注8 「大地と意志の夢想」P 91

注9 前掲書 P 106

注10 " P 96

注11 " P 103